

## 「小樽市ふるさとまちづくり協働事業」 事業報告書

<b>団 体 名</b>	心の城総合芸術工場		
<b>事 業 名</b>	IAG AWARDS 裏小樽展「高島亮三展 表高島×裏高島」		
<b>実施期間</b>	令和7年10月2日(木)～10月13日(月祝)		
<b>事業の目的及び期待する効果</b>	<p>小樽の豊かな自然と歴史文化を大切にしながら現代のアート表現と融合させることで、新たな芸術文化の創造と発展を目指す。また、小樽出身の詩人、小熊秀雄の作品や哲学を通じ、芸術の力で人々の心を豊かにし、共感と感動を生み出す。</p> <p>小熊秀雄がつなぐ縁で広域連携するのは東京都豊島区の「池袋モンパルナス回遊美術館」。小熊秀雄が命名した若手芸術家が集うコミュニティと彼らによるアートムーブメント、「池袋モンパルナス」を豊島区は貴重な文化遺産として街づくりに活かしている。アーティスト・イン・レジデンス(AIR)の拠点となる「裏小樽モンパルナス」も小樽市及び近郊で活動する新進のアーティストたちが集う場所を目指しており、本事業により豊島区池袋と小樽双方の文化芸術の底上げを図る。</p>		
<b>実施額</b>	事業費	400,946 円	助成額 291,806 円
<b>事業内容</b>	<p>IAG AWARDS 2024「裏小樽モンパルナス特別賞」次点だった高島亮三氏(東京都在住)による AIR。作品およびコレクションの展示のほか、制作、フィールドワーク(市民参加も含む)、ギャラリートーク、市民参加型イベントマッチを行った。</p> <p>1)「表高島」としての作品は 1,300 個の折り紙爆弾を千羽鶴のようにディスプレイした「WAR IS PEACE」。今回の展示では会場にあわせた表現形式として、メイン作品の背後にも爆弾を配置。爆弾を吊るした天井には爆撃機のシールを貼ることで「爆撃機が爆弾を落とす」という場面を再現し、戦争の恐ろしさをよりリアルに伝える作品となった。在廊中には折り紙爆弾を制作し、来場者に作り方を説明した。</p> <p>2)「裏高島」として、彼の作家性、審美眼を養ってきた「拾ったもののコレクション」を展示。大小さまざまな石などの形状や色合いに物語を見出し適切なタイトルをあてはめることで、見方を変えれば何気ないものの中に発見や感動が隠れているというメッセージを来場者に伝えた。</p> <p>3)長期滞在で小樽市内を精力的に歩き、「拾ってきたもの、入手したもの」を新たにコレクションとして展示。さらに試行錯誤の結果、「内なる小樽」というタイトルの作品を制作、展示した。10月5日には市民参加(5名)で高島地区を歩くフィールドワークも行った。</p> <p>4)10月4日のギャラリートーク(10名参加)では「自選作品ベスト10」という内容で、これまでに制作した作品を紹介。作品に込めた思いや制作秘話などを語った。</p> <p>5)10月13日のイベントマッチ(14名参加)では、小樽で制作した「内なる小樽」の制作過程、試行錯誤などを解説したあと、好きな石を持ち寄って魅力を説明する「いし自慢大会」を開催。大人から子供まで参加し、いつ、どこで、どのように石を発見したのかななどを自慢しあった。</p>		

## ◎事業の日程について

月日	内容	想定事業効果 (参加人数等)	事業効果 (実績)
8/7~10/13	チラシ配布	3,000 部	3,000 部
10/2~10/13	展示	150 名	279 名
10/4	ギャラリートーク	30 名	10 名
10/5	フィールドワーク	10 名	5 名
10/13	イベントマッチ	10 名	14 名

## ◎事業評価について

### 1. 事業の目的の達成度

(前ページに記載した「事業の目的」を達成することができたかどうか、反省点等も含め具体的に記入すること)

○石をはじめ拾いもののコレクターであり、市内中心部はもちろん高島、赤岩、塩谷、朝里、張碓まで広いエリアでフィールドワークを行い、小樽の自然に深く親しんだ。また総合博物館の学芸員から小樽の石の特徴について聞き取りも行った。

○小樽在住のアーティストだけでなく、小樽美術館で展示を行っていた写真家高木陽春氏も来場、アーティスト同士の交流を図った。在廊中は来場した市民に作品のコンセプトや折り紙爆弾のつくり方、コレクションの説明などを積極的に行い、コミュニケーションを取っていた。

○9/29~10/4 まで、昨年に続き「池袋モンパルナス回遊美術館」実行委員長の小林俊史氏が裏小樽モンパルナスに滞在。展示を見ていただきながら高島氏や小樽の関係者と親交を深め、今後も広域連携を強力に進めていくことを確認した。小林氏からは「IAG AWARDS の都市間連携で、ここまで AIR を積極的に展開してくれている地域はない」と謝意を伝えられた。

○北海道新聞、読売新聞、朝日新聞、FMおたる、HBCラジオでも展示を取り上げていただき、充実した告知、宣伝が実現できた。

○高島氏が朝里海岸で拾った石と塩谷海岸で収集した砂鉄を使って制作した道祖神「裏小樽石」を寄贈いただいた。芸術交流のシンボルとして大切にしたい。○芸術の力で人々の心を豊かにし共感と感動を生み出すという目的は十分達成され、また今回の AIR により様々な人たちの交流拠点としての「裏小樽モンパルナス」の認知は高まったと感じている。

### 2. 事業の効果（参加人数の面から）

(実績の参加人数は想定した人数の何パーセントだったか) ※実績数÷想定数で計算

○チラシ配布 100%

○展示開催 186%

○ギャラリートーク 33%

○フィールドワーク 40%

○イベントマッチ 140%

(上記の割合となった理由や上記の割合に対する自己評価などを記入すること)

チラシ配布枚数を倍にした効果もあったと思うが昨年の来場者実績(138 名 / 一日平均 15 名)を超えた(一日平均 23 名)ことは大変良かった。週末の企画は小樽市内で他のイベントも多数開催されており動員面ではもうひとつであったが、内容は充実しており参加者は大変満足していた。

### 3. 参加した方々や、周辺の方々の満足度

(アンケートや聞き取り等によって把握した参加者の感想や反応を記入すること) ※別紙による提出も可  
「新聞を見て来た」、「石に興味があったので」という声や、複数回来場する方が多かった(展示物が徐々に増えていったことが複数回展示に来る方が多かった一因だと推測される)。また小樽軟石を含め「小樽のもの」を寄贈する方も3~4人おり、同じようなアンテナを持っている方を引き寄せた展示になったと思う。小樽在住のアーティストの方にも「大変いい展示だった」と高評価をいただいた。

### 4. 今後の事業について

(1~3に記入した、事業の達成度・効果・満足度を踏まえ、来年度以降はどのような事業を行っていく予定か、記入すること)

二度目のAIRだったが、18日間の長期滞在で小樽という街の良さを十分体感していただいたと思っている。昨年に続き会場の空間を立体的に演出するスキルの高いアーティストを招聘でき、ギャラリーとしての可能性も広く伝えることが出来た。2025年11月には来年秋滞在予定のAIRの選考を行う予定で、今年以上の結果を出せるようなアーティストを選びたいと考えている。IAG AWARDS側の支援体制も整っており、高島氏からは「破格のAIRです」という言葉もいただくなど、本事業は気鋭のアーティストの注目を集めつつある。出来る限り継続していきたい。